

地下街バックヤードでのホームレスK

――前主体、前意図の場での微細な出来事

奥野忠昭

冷えの塊が衣服を貫いて襲って来る。まだ冬でないのに寒さが身に染みる。バックヤードは今までいた地下街とはえらい違いだ。Kの背が少しだけ前かがみとなり、背中から登山用ザックが下ろされた。中から薄手のジャケットが出されて、インナーシャツの上に重ねられた。薄着をしすぎたのかもしれない。

五十五歳のKにとってザックを背負うのはかなりの重荷だ。ただ盗まれてはいけないという不安からいつもザックが背負われる。ここなら大丈夫と思うようになった。明日からは柱にくっついていて箱の後ろに隠されることになる。

バックヤードのこの場所が三日前から、ホームレスKのねぐらになった。地下街のあちこちを歩いているうちに地上に出る階段元の片隅に古ぼけた鉄の扉があり、取っ手を手が勝手に握り、手前に引くと、軽い音がして扉が開き、隙間ができた。背負っていた登山用ザックとダンボールなどを載せた小型のカートと共になんとなく中に入った。扉がKを引き込んだのだ。だから、最初からここをねぐらにしようと思ったわけではない。

中に入ると一車線に満たない通路というか空間があり、通路の右側には真四角のコンクリートの柱が古代ギリシャの神殿跡のように奥に向かって並んでいる。さらに柱と右側の壁との間には幅一メートル余りの空間があり、それも細いもう一つの通路のように奥に続いている。ただ、右の壁、つまり細い通路の壁に沿って太い導管が二本、逆にこちらに向

かって走ってくる。

さらに視線が上を向くと、天井板がなく、コンクリートの壁がそのまま天井になっている。その天井に張り付くように金属の箱をいくつもつなげたようなダクトや銀紙で周囲が巻かれたような丸いダクトがまるで大蛇がとぐろを巻くようにあり、それらが複雑に絡み合っている。どれがどういう役目をはたしているのかまったくわからない。きっと、バックヤードの換気口（給気口・吸気口）や地下街の換気口に繋がっているのだろう。それぞれにファンが回っているので、目には見えない振動があり、さらに、バックヤードの換気口も近くにあるようで、それらが合わさって軽い音が始終鳴っている。

さらに天井には電線の束のようなものもあり、天井は混雑している。

また、蛍光灯が天井の中央辺りから間隔を置いて吊されていて、さらに左の壁の上にもところどころに蛍光灯がくつついている。

今度は視線がKの立っているすぐ横を向く。入ったところの前の柱には背が高くても横幅の広い箱が右横にくつついていて、しかもその箱が柱よりかなり前に出ている。その後ろに隠れると、対面からはもちろん左側の通路からもまったく見えない。それに、通路の右側はバックヤードの終わりで行き止まりになっている。おそらく、壁の向こうは地下街もないのかもしれない。つまり右側はこのバックヤードの終わりで、導管のみが壁を突き抜けて向こう側へと続いているだけだ。

そう気づいた瞬間、足が前に動き、手や腕が、カートを押し、箱の後ろに到着すると、今度はカートに積まれていた断熱板が箱の後ろの床に広げられ、その上にダンボールを三枚重ねて置かれた。さらにその上に拾ってきた毛布が置かれ、後はザックから寝袋が出さ

れば眠れるようになる。これはしようとしてしたわけではない。身体がそうしてしまっただ。

寝るにはまだ早い、足が動き、ねぐらから離れ、広い通路を数歩出て、右を向く。自身の足音が少し遅れて聞こえる。残響の影響のせいだろうか。

また、どこかで、風の音のようなものが聞こえる。ここは部屋なので風など吹くわけではない。何の音かわからない。

前方、ほんの少し離れたところに水が撒かれた痕があり、まだ水が薄く床に広がっている。今いるところと水の床とが数メートル離れているのに、歩くと靴底が滑りそうで、進むと少し身体が揺れた。前方の左側の壁には、ところどころに褐色の鉄製のドアがある。それぞれの店には一つのドアがあるのだろう。壁の向こうはいろいろなお店が並んでいるに違いない。ただ、Kのねぐらの対面近くにはドアがない。

足が斜め向こうにある壁に向かって動いていく。少し距離がある。一步、二歩、……、足音がするが、その足音がやはり遅れて前から聞こえてきた。壁に当たって跳ね返ってきたのだろうか。このようにバックヤードに來ると、いろいろなことが今までとは違って、見えたり起ったりする。今まで聞こえなかった音もはっきりと聞こえたり、今まで気にもとめなかったこと、例えば呼吸のリズムや匂いや音や湿度まで気になる。感覚も鋭敏になっているようだ。どうも頭の構造が変わるような気がする。でも自分のような者にとってはそのほうがむしろ適している。だから今はねぐらを変えるつもりはない。

視線が床の方向を向いた。影ができて、前に伸びている。視線はそれを追う。影が壁に届き、上に登っていく。どうもおかしい。蛍光灯の位置からして、そのようなところまで

伸びるはずがない。後ろを振り返り、蛍光灯の位置から影を確かめる。やはりおかしい。

前を向く。影はすでに縮んでいた。

さらに壁に近づいた。壁の方からかなり強い匂いが漂ってくる。その匂いは以前どこかで嗅いだような匂いだ。壁から来る匂いがKの記憶にある匂いと繋がるような気がしてならない。

さらに身が壁に近づく。壁には白い線が連なっていて、落書きの跡のようだが、消えているところもあり、ただの短い線の集まりになっている。ただ大きな曲線もある。それは動物の腹のようで、何かの輪郭線の痕のようだが、何の絵だかわからない。前に突き出た端が折れ曲がっていたり、大きな垂れ乳房のような形に見えたりもする。さらに、線に囲われた中には刷毛で塗られたような平べったい白のペンキの痕が散らばっている。視線がそれらの上を走ると、途切れた線や白いペンキ痕が徐々に形となって浮かんでくる。鋭角に交わっている線は牛の角か、あそこは牛の鼻、そう捕らえだすと、いつきに黒の曼陀羅模様のある白い牛が頭に浮かぶ。牛の垂れた乳首、そこから牛乳を搾っている女性の農婦まで浮かんだ。それに、壁からは匂いが牛乳の匂いに思える。背筋に痛みが走る。

不正が告発され、村に一つしかなかった牛乳工場が倒産に追い込まれた。それは予想もなかったことだった。ただ、売れ残りの返品された賞味期限切れの牛乳を新しい牛乳に混ぜて、牧場からの生牛乳と偽って売られていた。それをしないようにKによって何度も社長に申し入れられたが、社長は聞き入れなかった。遂に、内部告発してその事情が地方紙に載った。そうすれば社長がそれを止めるだろうと思ったのだ。だがそれが新聞に載ると、販売の中心だった多くの道の駅の売店が、売るのをやめた。牛乳がまったく売れなく

なり、工場が倒産し、工場に納めていた畜産農家も牛乳の売場場所がなくなった。それで彼女たちや村の人が怒ってKを責め、Kは村に居れなくなった。

白い牛の姿が消えたが、痛みだけが消えない。これは牛の絵なんかではない。ただの線やペンキの跡だと何度も言いきすが、線を注視するごとに牛の姿が現れる。

ようやく視線が壁から剥がれ、身が広い方の通路に出る。

遠くから微かな音が聞こえた。足音のようだ。普通なら聞こえないだろうが、ここではKは動物のように微かな音でも聞こえる。点検員の足音か。手が勝手に震え出す。心拍が急に上がる。ここでは立っておれなくなる。身体が向きを変え、足がねぐらへと向かう。ねぐらにつくと、一度は箱の陰に身を隠したが、音が気になりだし、柱の陰まで出た。視線を遠くへ送る。

足音の主と思われる紺の制服らしいものを着た男が記録用紙に向かって手を動かしている。ただ、かなり遠いので、はっきりとはわからない。どうもこちらの方をまったく向かないようだ。Kの身が柱の前に出る。

突然、斜め前方から金属のきしむような音が鳴り響く、視線がその方を向く。左の壁の扉が開かれ、中から店員らしい若い女が、大きく膨らんだビニール袋を両手で重そうに掴み、ややかがみ腰になりながら出てきた。それを扉の横に置くと立ち止まり、視線をこちらに向けた。自然と頭が下がったが、彼女は何の反応もせず、すぐに扉の中に引き込んだ。すると照明が一つ瞬いた。それにつれ、足が数歩、通路の中央まで出て、奥の方に向くと点検員の姿がかなり大きくなっていた。どうもこちらに向かっていているようだ。辺りの空気が張りつめ、温度さえ上がったようだ。どんどん近づいてくる。足が柱の陰に向かって動

く。さらに箱の後ろに隠れる。ここなら、彼に見つからない。

ただ、点検員の男が自分を見つけたとしてもここから強制的に追い出すことができないだろう。

以前、地下街をねぐらにしていたとき、同じ場所にいた若いホームレスの青年が「点検員がバックヤードのホームレスをひとり殺したことがある」と言っていた。今の点検員かどうかは定かではないが。また、このバックヤードでかどうかもわからないが、ただ、ホームレスがなかなかバックヤードから出ないものだから、彼を引きずり出そうとして、ホームレスが鉄の扉に頭をぶつけ、脳挫傷で死んだそうだ。それで、世論が大騒ぎして点検員は非難されるし、多くのホームレスやどやの住人たちが大挙して地下管理所に抗議に押しかけるし。点検員は過失致死傷の罪で起訴され、地下街管理所長は管理不行き届きということで辞任に追い込まれた。だからそう簡単には追い出されないだろう。

再び視線を箱の上にまで動かし、通路の先まで送る。点検員はしばらく、何かを調べていたが、やはりこちらに向かって近づいてきた。

足音がどんどんと近づいてくる。辺りの空気が緊張する。もうねぐらの前辺りまで来ているようだ。と突然辺りが暗くなったが、すぐに元に戻った。きつと蛍光灯が一度消え、瞬時に元に戻ったのだ。

「電灯がおかしくなったかな。それとも元のどこかが悪いのか」と声が聞こえた。続いて「それに遠くからこちらを見たとき人が動いているように見えたのだが、店員でも裏へ出てきていたのかな。人の気配も残っているようなのだが」と言った。と同時に、どこにあるのかわからない「換気口」のファンの音が急に高まり、その声と共鳴した。Kの心拍も

それに同調して高まる。「いや、俺の仕事は機械の点検だ。人のことなどどうでもいいさ」とまるでKに向かって言っているように喋る。

再び足音が聞こえたが、それが徐々に低くなった。柱の後ろまで身体を動かして、去っていく点検員に視線を送ると、後ろ姿とその影が道に濃く出ている。点検員の足音とKの心拍が同調し合い、まっすぐなはずの通路がS字状に見え出した。床と壁、壁と天井の区別の境界線が溶け出し、バックヤードは筒状になった。立っているのに身体が揺れる。

足音が聞こえなくなり、点検員の影もなくなる。それに反比例して、天井からダクトの音が、ダ……ダ……とリズムよく鳴り始めた。と同時にKの心拍とダクトの音とが繋がる、しかしふたつの音はまちまちだ。しばらくすると心拍とダクトが調整し出した。ダ……ドク……ドク……と続く。すると、その音に引っ張られるようにして牛乳を攪拌する攪拌機のリズムと共鳴し合う。同時に、兄の声が蘇る。「余計なことをしやがって、村では生きていけると思うな、出ていけ、出ていけ」と刃物のような怒声と仁王のような顔が出てくる。さらに記憶が裏返し、痛みだけが走り出す。「痛い」と声が出そうになるが途中で止まる。いつの間にか点検員が消えていた。そのとき兄と点検員とは同種なのだと気づく。

緊張がいつきに萎え、疲労と空腹が広がった。昼飯はパン一つとお握り二個で済まし、晩飯はまだ食べていない。金銭の獲得は「もく拾い」と、地下街で迷っている人を目的地へ案内して、三百円を寄付してもらう自称「人間タクシー」による。立つ場所が悪かったのか、今日は案内する人数が極めて少なく、地下街のコンビニでお茶を買ったので、わずかな金しか残っていない。

柱に背をもたせ掛け、前の様子へと視線が向かう。先ほどから何度も腹が鳴る。明日の

朝まで待て、喫茶店のモーニングサービスへでも連れて行ってやるからと諭す。

再び斜め前の扉が金属の摩擦音を出して開く、先ほどの女店員が大きな半透明のビニール袋を重そうに持ってまた出てくる。彼女が。こちらを見る。視線を彼女に送ると、慌てて彼女は横を向く。

ゴミ袋を先ほどのゴミ袋の横に置く。とまたすぐに帰った。袋の中身がうつすらと見える。バックに入れられた弁当のような物がある。身体が自然とそれに近づく。手が勝手にくくられているビニール袋の口を開く。やはりバックに入れられ、透明フィルムで覆われた弁当だ。おそらく賞味期限切れだろう。手が弁当に近づき、それをふたつ持つ。消えた女店員の顔がちらつき、心拍が早まり、ダクトの音との調整が崩れる。またも痛みが走り、身体が倒れそうになる。だがゴミの弁当は手や腕からは離れない。抱えられたままねぐらへと運ばれた。

今日は、案内した人数が多かった。「喫煙所に案内」という、首から提げたダンボールの宣伝文がよく効いた。地下街にある喫煙所など、スマホの地図にも載っていないのではないか。十四、五人ほどは案内した。感謝して五百円玉をくれた客もいた。その金で、久しぶりにカレーを食べ、お茶と菓子パンを二個、ねぐらの近くのコンビニで買った。菓子は明日の朝の食べものにする。コンビニでお金を払うとき、女店員を眺めたら、昨晚、ゴミを出していた女店員だった。「今、カレーを食べてきた」と独り言を言った。

ねぐらに帰ってくるのは案外早い。四時半には仕事を終える。それ以後は人はごった返

すが、皆、地下街に慣れた人たちばかりだ。案内を頼む人などいない。

しばらく休憩すると身が自然と昨日と同じところ、大きな柱の陰へ動く。さらに、足だけが陰の中に立っている。他の部分は柱からはみ出て、視線を遠くに走らせるが、明るさが地下街よりずっと弱いのでよく見えない。だが、足音だけはかなり遠くでも聞こえる。ここでは聴覚は動物以上だから。

やはりいつもと同じような足音が聞こえてきた。点検員だ。こちらに近づいてくるようだ。昨日の足音よりも力強い。身の大部分を柱の陰に引つ込めたが目だけが外に出たままだ。

近くに来た。だが、点検員の視線がこちらを向かない。突然、彼の腕が上に伸び、右手薬指を一本立てる。しばらくそれが続いている。「少し湿気が高いようだ」と独り言を言う。どうも湿度を観察しているようだ。

目が引つ込み、柱の陰でKも指を出して同じ動作をする。確かに皮膚が水気を感じている。このような感じは初めてだ。皮膚感覚も鋭くなっている。

地上では雨が降っているのかもしれない。バックヤードの空気は地上からダクトで運ばれてくるのだから、地上と似た湿度になる。ただ、昨日はこのようなことをしなかったので湿度が高まったのかどうかはわからない。

また目だけが柱から出て点検員を追う。

点検員が肩から下げている鞆から懐中電灯を取り出し、昨日、女性が出てきた「店裏の扉」の横に取り付けられている金属の箱を開き、懐中電灯で中を照らし始めた。箱の中のどこかを触っている。その動きがKの眼球を揺する。懐中電灯の光が金属板に当たり、反

射してこちらまで届く。蛍光灯とは違った光の揺れ、それが微かに聞こえてくる水道管の音のリズムと重なる。

点検員が点検用の箱から離れ、こちらへと向かってくる。その前に、身が勝手にねぐらの箱の陰に入る。しかし視線はしっかりと点検員を捕まえている。点検員は柱を越え、さらに前に進み右の壁の前に立つ。導管をじっと見つめる。何を観察しているのかわからない。Kの身が誰かからあんなに見つめられたことはない。いや、彼に見つめられるのは避けたい。それは捕縛されるときだ。捕縛されれば支援施設へ送られて、ホームレスにさえ成れなくなる。

点検員の指が動き始め、導管を触り出した。「大丈夫、スムーズに流れている」と呟く。水がいきよよく流れ、導管を揺すっているのだ。導管の表面は微かに振動し、犬にしか聞こえないような音も立てている。音ならKの耳だって感受できる。昨日、耳を導管に近づけて、導管を掌で触れてみた。ふたつの導管とも微かに震えて、音を立てていた。導管の響とリズムがKの卒業した小学校の校歌となった。しかし、どちらが清水の導管でどちらが汚水の導管かわからない。しかもそれが正常か異常かの判断もできない。

点検員にはそれがわかるらしい。

しばらく導管に視線を送りながら佇んでいたが、やっと元の通路に帰った。するとそれが原因のように灯りがまた点滅を繰り返した。点検員の顔が天井の方を向きながら蛍光灯をひとつひとつ確かめながら、身を通路の奥の方へ移動させていく。どの蛍光灯が点滅を繰り返しているのか見るためだ。まだ異常になっている蛍光灯全部は見つけられていない。

Kは自然と彼に引かれるようにねぐらの隠れ家から通路に身をさらして、点検員の足音に合わせながら、彼の後ろを歩き始める。彼の後ろに彼の姿と同型の影が飼い犬のように後をついて行く。さすがに尻尾は振らないが。その後をKの影が、これも、主人を引っ張る飼い犬のように後をつけていく。Kの犬の方が速度が少し速いのか、どんどん点検員に近づいていく。それに、それらの影を注視していると、今度は影がお互いの分身のようになった。Kの影が点検員に近づいたので、ふたつの影が重なり始めた。また、影の形も奇妙な形に変形した。それに伴ってKの感覚が揺れ始めた。言葉では言い表せないような混乱が生じ始めた。さらにKの影が点検員の影と完全に重なってしまった。すると、K自身がなくなったような気持ち、あるいは自分の前方がなくなった気分になり、自分が進んでいるのか、点検員に引かれているのかわからなくなった。さらには自分がたして動いているのか、影の上に身体を乗せて流されているのかわからない。

それで、影を離そうと立ち止まったが身が勝手に動き、影からなかなか離れられない。突然「今日の点検員さん、仕事が終わるのがいつもより早い」という声がどこからかした。声の方に視線が走ると同時に足の動きが止まった。

片手にモップを持ち、もう一方の手に半分ほど水の入ったバケツを提げた老婆が点検員の向こうに立っている。点検員は老婆の横を黙って通り過ぎる。影も彼女についていくがKの影は動かない。ようやく離れることができた。

モップの先端から多くの水が滴る。床に水たまりができていく。それをすぐにはモップで広げない。老婆はしばらく水たまりを見つめている。水たまりが広がり天井の蛍光灯が映っている。蛍光灯の写像が揺れてしわしわになり、そこから光が反射しKの眼を優しく

撫でる。

老婆はまだKの存在を認めない。蛍光灯の写像が薄くなるが依然映っている。それに被さるように天井のダクトも映り、抽象画のように見える。

突然、妻と息子をつれてある島にある大きな美術館を訪れたことが眼前に浮かぶ。手が震え出す。唇も震える。

瞬時に視線が清掃員の老婆に移る。老婆のつくねイモのような手に集中する。それがモップを動かす。先端のモップ糸が水を含み、水たまりを広げていく。モップ糸が床を擦る音がスーツ、スーツと滑らかな音を出す。するとKの呼吸が、それに引っかけり、吸い吐く、吸い吐くとリズムを刻む。ふたつの音が共鳴し始めるが、やがてスーツとスーツの間に「吸い」が入り、スーツ…吸い、となり、次のスーツの間に「吐き」が入る。スーツ…吸い…スーツ…吐き…とリズムよく同調し始める。そのリズムがしばらく続くと、それに合わせて肩が上下した。

だが、清掃員の老婆は依然Kに視線を送らない。無言で水を広げ、周りの床を拭きつける。

ようやくKの身が扉のついている壁の方へと移動を始めたとき、それに気づいたのか、「今日は空気が丸くてね、心地よかったよ」と呟いた。

壁のところへ移動した。ただ、その時、また自分の足音が少し遅れて聞こえた。足音と足の動きがズレている。先ほどの影の見え方のせいだろうか。

壁の前に着いた。そこに立つ。これもそこへ行こうと思ったわけではない。身が自然とそこへ動いたのだ。

壁との距離が二メートルほど離れている。Kのやや斜め前方を濃い影が床を這っている。さらにその影が伸びて壁のところで直角に折れ曲がり、壁の上に登っていく。ところが一方、そのまま壁を突き抜け、まっすぐに奥に伸びていく影もある。それが壁の向こうにこちらとは別の空間があり、空間が裂けているように見える。それにつれ、今いる空間も不確かな空間に思えてくる。それに、壁もただの壁でなくなる。不透明な膜に過ぎなくなる。床に映る影を見る。これも二重になっている。ふたつに裂けた空間。二つに分割された自分、一瞬すべてが不確かな存在になる。

三日ぶりに、昼食を終えてから、市の福祉施設へ寄り、シャワールームでシャワーを浴び、衣類を洗濯機で洗い、乾燥させてから、背負ってきたザックに入れた。その後、一度、バックヤードへ戻って、それらを置き、再び地下街へ出て、「人間タクシー」を行った。得た金で食事を済ませて帰った。

いつものように身体が自然と柱の前に出る。時間もいつも通りだ。ところが大きなゴミ袋が鉄の扉の横に置かれていた。若い女店員が扉を開けて出てきたのに違いない。じつとゴミ袋を見つめてしまう。

すでに清掃員の老婆がねぐらの柱から十数メートル離れている次の柱の横にくっついて、いる金属の箱に座ってタバコを吸っていた。煙がこちらに向かって流れてくる。空気の流れが可視化される。

視線が合ったので軽く頭を下げたが、何の反応もない。ただ、じつとこちらを見つづけ

る。彼女の視線が自分を詳しく観察しているようだ。

清掃員の老婆は立ち上がるとバケツとモップを持ち、足をもと来た方へと動かせた。それにつれ、Kも箱に向かって足を前に出した。Kと清掃員の老婆との距離が縮まらない。

老婆は向こうを向いたまま。「今日の影が薄い。湿度が下がると影が薄くなるのよ」と呟く。

箱のところまで来て、老婆と同じように座り、今までKが佇んでいた場所に視線を向ける。自分の残像がこちらを見ている。しかし、かなり薄く、ぼやけている。だが、その方が自分らしい。

タバコを吸わないKは音を聞くしかない。バックヤードには静寂というものがない。なにがしかの音が鳴っている。導管を流れる水の音なのか、換気口のファンが回る音なのか。それに集中すると、天井からの音と壁側からの音とが混じり合い、響き合って聞こえる。テンポの長い響き。パイプオルガンの音楽のよう。バッハかモーツァルトか。一瞬、バックヤードは教会となる。

理由もなくKの足が立ち上がる。通路の中央より少し左側の壁寄りに出ていき、壁を見つめる。前に影がふたつできている。左側と右側に光源があるからだ。物理的理由はわかっているが、奇妙に感じる。ふたつの影がKの足下から少し前では、それらは重なっている。以前にも影の重なりを二度経験したが、それらとは違う。自分の影がはっきりとふたつできている。またもいったいどちらが本当の自分の影かと迷ってしまう。それに影を先端からこちら側へと辿っていくと自分の立っている位置がズレている。今立っている位置がふたつに感じる。位置が左右にズレる。前の空間が横にふたつにズレ、足下が二つに分

かれ、立っていられなくなる。

慌てて影から目を逸らす。と同時に、通路の奥から子どもの声が流れてきた。点検員の声も混じっている。

声で目覚めたような気分になる。空間も変わったことはない。ただ影がふたつあるだけだ。子どもの声がKの視線を逸らしたのだ。彼らの声がますます大きくなる。点検員の声もそれに混じる。Kは慌てない。ゆっくりと柱のところへ足が動く。

「コワイヨ、コワイヨ。ドンドン走れ。ドンドン走れ」

「コワイヨ、コワイヨ。ドンドン走れ。ドンドン走れ」……………

「こらー、ここは遊び場じゃないぞ。子どもの来るところではない」

「ワイー、ワイー、怖いおじさんが現れた」

「どこから入ってきた、こら」

「ヒーミツ、ヒーミツ、シラレタラコマル、ワイー、ワイー、シラレタラコマル」

「こらー」

子どもたちはKの前を通り、Kが出入りしている扉に向かって走り去る。

Kの背中が柱に貼り付いたまま。

点検員が少し遅れて現れる。Kの方を向かない。ただ、言葉だけが届く。

「子どもって、なかなかすばしい。ちくしうめ。逃げられた」

点検員はすでに走るのを止めている。

点検員はKに気づかなかったのか。それとも、気づいていて、あえて無視したのか。

「まったく、ここを遊び場にしゃがって」

バックヤードが細長い遊び場となっていたのだ。初めて気づいた。バックヤードの別の使い方。子どもたちにとって、ここは通路ではなく遊び場なのだ。いや、ここしか遊び場がないのかもしれない。地上の道路のすべてを車が走り、危険な場所となっているから。

Kの足が子どもが消えた方向を向き、数歩前に出る。

「子どもたちが秘密の通路を伝ってまた現れるよ」とどこからか声がする。それが点検員の声か、K自身の声かわからない。

今日も仕事を終え、食事も済ませてからねぐらに戻ってくると、いつもゴミを置く壁から少し離れたところで、若い女店員が壁に背をもたせ掛け、体育座りをし、頭が垂れていて、腕で目を覆っている。引きつった声が連続して聞こえてくる。時々、鼻を吸る音も加わる。

Kの身体は四角い柱にもたれながら聞き入る。その声が妻の泣き声を引き出す。「告発する前にどうして私にひと言、相談してくれなかったのよ。こんな重大なことを。私ってあなたの何なの。ただの同居人、賃金無しのお手伝いさん」「だって、君には関係ないことだ」「関係ない、冗談じゃないわ。その結果、皆から白い目で見られ、話さえしてくれないのよ。それに、昇太だっていじめられ、学校へ行けなくなった」「こんなことになるとはねえ」「それでもあなたは自分は正しかった、俺を批判するやつは間違っていると思っっているでしょう」「すまない。耐えてくれ。時が経てば収まる」「そんなのんきなこと、私は昇太をつれ、実家へ帰らしてもらいます。二度とあなたの顔なんか見たくありません。

せん」妻は去り、「すまなかった」と思い、何度も謝り 有り金のすべてを彼女に渡した。「世の中って、不条理なことってありますよね」と声をかけに足を動かそうとしたが、足が動かない。なぜだかわからない。ただ彼女の声のリズムとなってKの呼吸を揺らす。息苦しくなる。「1995年6月1日、百合子、ここで泣いた」という先日見つけた壁の落書きも頭に浮かぶ。彼女にとってどのような悲しいことが起こったのか知りたい。

彼女の悲しみ、妻の悲しみ、Kの悲しみが同時に頭を占拠した。しばらくそれらが去るのを待つ。

いつもの時間、清掃員の老婆が現れる。今日はモップもバケツも持っていない。大きな手提げ袋を肩から下げている。中から雑巾を出し、右側の壁まで進み導管を拭き始める。例のカビ臭い匂いが漂ってくる。この空間は夜中に賑わい、幾人かの人が店ごとの荷物を運び入れる。あるいはゴミを運び出す。彼らの足からホコリが持ち込まれるようだ。ただし、その時刻、Kは柱や箱の後ろで耳栓をして眠っている。何が起きているのかわからない。

老婆の清掃員が若い女店員をちらっと見るがすぐに視線を逸らして導管を拭く。腕を規則正しく前後に動かす。だがそのリズムが女店員の泣き声とは合わない。Kも呼吸を合わせようとするがそれも合わない。

いつものように指を一本天井に向かってかざす。湿度が異常に高い。きっと地上には雨が降っているのだ。Kの肌が求める湿度とズレる。それに空気が重い。身体を動かすのに0.005%ほど余計に力がある。

「地上は雨ですか」と老婆の清掃員に声をかけるが応答がない。声を高めてもう一度言う。ちらっとこちらを見る。だが応答しない。しばらくしてから声が届く。

「導管が湿っている。いつものように雑巾が滑らない。拭くのに力があるわい」

今度はKが応答しない。何と答えたらいいのか言葉が出ないのだ。しばらくしてから「いつもなら、もう点検員さんが現れてもいいものですが」と独り言を呟く。

壁に反響した声が空気を少しだけ震わせた。女の泣き声が高くなる。言葉では表せない音とリズム。それと噛み合うリズムはどこにもない。

遠くに視線を走らせる。まっすぐのはずの通路がまたS字形に見えた。足が前に進むときもきつとS字形に動くだろう。

突然、清掃員の老婆が導管を拭くのを止め、若い女に近づく。何か声をかけるのだろうか。視線が彼女を追う。清掃員は若い女の横に立つが、黙っている。彼女から一メートルほど離れたところの壁を拭き始める。手がリズムよく上から下に向かって三度動くと、今度はその下に移る。それが彼女の泣き声に合わせて拭いている。老婆は女の方を見ない。黙々と壁を拭きつづける。しかし、老婆の腕の動きのリズムと若い女の泣き声とが合っている。それに合わせてKの息も合わせようとしたがどうしても合わなかった。

今日は案内を頼む人が少なかったので、仕事は早く切り上げ、ねぐらへと帰ってきた。地上ではまだきつと日が高いだろう、子どもたちの遊ぶ時間だ。先日、子どもたちが現れたのもちょうど今頃だった。また、子どもが現れるかもしれない。身が自然と柱の前に出

た。ダクトの音もいつもの通りだ。音楽の音に聞こえるが、それもいつもの通りだ。それを聞くのも習慣になった。壁の匂いもするがいつもの匂いだ。気に止めなくなっている。

自然に奥の方に耳を傾ける。子どもたちの声かダクトが送ってくる風の音か区別がつかない。だがその音が「「コワイヨ、コワイヨ。ドンドン走れ」「コワイヨ、コワイヨ。ドンドン走れ………」」「ヒーミツ、ヒーミツ、シラレタラコマル、ワイー、ワイー、シラレタラコマル」という子どもたちの声に変わる。すると足が奥の方に向き、歩き出した。あの子どもの足の速さに近いほどに速く動く。通路がふたつに分かれている手前まで進んだ。

奥で通路がふたつに枝分かれしていることはバックヤードに来たときからわかっていた。そこを見るごとに心が惹かれていたのだが、今日はようやく足がここまで動いた。

左側の壁に沿ってやってきたので影が左側の壁に映り、影と並んで歩いてきたのだ。ところが今は影が消えている。横の壁は左に大きく折れているので前は少し広場になっているが、影は床にも映っていない。前の影は消えている。足が右側の通路へ傾くか左側の通路に傾くか。考える前に足が左の通路に傾いた。足が左側を選んで前へ進んだ瞬間、左の壁には影が映っていた。影がKより先回りして待っていてくれたとしか思えない。前の影は自分の未来であることがここではっきりした。いつも自分の未来を示す影を一步一步消しながら進んでいるのだ。

左の通路は右の通路に比べかなり暗い。それに壁や通路のコンクリートが黒っぽく、垢がこびりついているようだ。前方の蛍光灯は遙か向こうにしかない。背中の方にある蛍光灯の光が強いので、影が前にのみできている。歩けば歩くほど影は伸びる。その動きに

引っ張られるようにして前方へ進む。

奥からの音がリズムよく聞こえてくる。換気口が近く天井にあるらしい。風の速度を感じるほどだ。風は波を打って肌に当たる。強い弱い強い弱いとリズムよく流れてくる。そのリズムが頭の中の子どもの声と同期する。徐々に子どもたちの声が通路の向こう側から聞こえ始める。「秘密の入り口、見つかるかな。秘密の入り口、見つかるかな」と言っているようだ。

身が暗い通路を自ずから進む。と少し足を運んだところに三角錐の赤いコーンが間を開けてふたつ置かれていて、その間に黄色いバーが通路を遮断し、バーの両端がコーンの尖った頂上に差し込まれている。棒の中央には「立ち入り禁止」という白い紙がぶら下がっている。文字が薄れていて読めないほどだ。紙も薄茶色に変色している。しかしそれがKの身体を強く圧迫した。今まで調子よく打っていたリズムが突然消え、同時に子どもの声も消えた。天井が低くなり、ダクトの音が激しくなり、それが胸を圧迫し出す。身体が激しく震え始める。空間が揺れていると感じる。

Kの手が勝手にバーの真ん中をつかむ。バーがコーンから抜ける。バーが高く上がり斜めに傾く。コーンに向かって野球のバットのようになり力一杯まわろうとする。コーンが飛び砕け散るだろう。

と、「右側は、くると回れば左側。左側、くると回ればまた右側」と後ろから声がかかる。腕の動きが止まる。バーは斜めになったまま止まる。振り返ると清掃員の老婆がマップを銃のように立てて微かに笑っている。蛍光灯の白い光を浴びて髪が銀色に光る。しわしわの頬が緩んで、眼が線になる。瞬間、頭が少しだけ下がる。老婆の頭もそれに応

じて下がる。初めてのことだ。

「若い女がよ、泣くのを止めたよ」と老婆が笑う。

身体が緩む。バーをゆっくりと地面へ置き、それを跨いで、老婆を振り返る。

老婆は銃を肩にもたせ掛け、もと来た通路を帰り始め、ソロリソロリと消えた。

左通路をさらに足が数十歩進んだ。耳を奥へ傾ける。再び微かな声が聞こえ出した。子どもたちの声だ。足の進む速度が自然と増すが子どもたちが現れない。いったいどこから入ってくるのか。またも「ヒーミツ、ヒーミツ、シラレタラコマル」と子どもたちの声をする。

もうすぐ通路の行き止まりだ。身が先に回転する、子どもたちの入り口を捜し出す。どこからかともなくまた声をする。「ヒーミツ、ヒーミツ、シラレタラコマル」、それはKの声に変わる。意図したわけではないのに自然とその声がKの口から漏れる。

右側の壁にくっつけて置かれているダンボールの箱に視線が向く。いくつか積まれている。腕が自然とその箱に手をかける。それを横に移動させる。するとそこに丸い穴が現れた。壁にあいた満月のような穴。少し温かな空気が流れ込んでくる。換気口からの空気とは異質な空気が辺りの空気をかき混ぜ、通路を目がけて流れ込んでくる。新しい空気の通り路ができる。

穴を眺める。穴の向こうは真っ暗、急な上がり坂。どうも昔の搬入口のようだ。通路の先は地上だろう。だがそれは見えない。なぜ壁に穴が開けられたのかわからない。空気を取り入れるためと考えたのか。

それにダンボールの箱は空のようだ。向こう側から押せばダンボール箱はすぐに崩れて

どこかへやれる。穴はバックヤードへの入り口となる。子どもなら難なく這ってこられる。だがKには小さすぎる、出ることも入ることもできない。

Kの耳は敏感になっている。すでに動物の耳と同じだ。その耳が確かに子どもたちの声をキャッチしている。もうすぐそこから子どもたちが入ってくるだろう。点検員に見つけれないように子どもたちによって、ダンボール箱はちゃんと積み直され、どこか秘密の出口から出ていくだろう。ひょっとしてKの入ってきた扉は子どもたちの秘密の出口だったのかもしれない。

今日も地下街での仕事はいつものようだった。食事もいつものように食べられた。さらにバックヤードに入ると表にいるより緊張感が和らぐ。身体がほぐれ、感覚も緩む。

いつものように柱の陰に立つ。導管の音に耳を傾ける。音が気になるからではない。習慣になってしまったからだ。導管の響きがリズムをとって感じられる。息のリズムが重なる。何の驚きもない。それが当たり前になる。鼻に入る匂いにも慣れた。

壁にある点線や刷毛で書かれた白いペンキ痕を見つめても白い牛には見えない。痛みも感じなくなった。

足音がする。清掃員の老婆の足音だ。その音とKの呼吸のリズムとが合うがこれもいつもの通りだ。もうすぐ老婆が水を撒くぞ。水が広がり、水たまりのようになり、その上に蛍光灯が映るぞ。

ダクトの音が聞こえる。すぐに呼吸のリズムと合う。これもいつもの通りだ。すでに習

慣になっている。点検員がいつ来るかもわかっている。来る気配を感じたらすぐに隠れて見つからないようにする。いや、見つかつて、点検員はKを無視するだろう。いないことにするに違いない。

心拍が高まる。いつもの早さではない。息がつまる。辺りの空気も固まる。

その時、蛍光灯が一瞬またいた。

Kの足が対面の壁に向かって動きだす。すぐに到着し、Kと壁が向かい合う。Kの両方の掌が壁に触れ、腕が必死に壁を押す。息が激しいリズムを打つが壁はまったく動かない。何度か同じ動きをするが結果は同じだ。視線が辺りを見回す。少し奥寄りの壁にモップが立てかけてある。足がそこへと動く。手と腕がそれをつかみ、モップを振り回す。

視線が蛍光灯を見上げ、それを狙おうとする。モップの竿が蛍光灯に当たれば、蛍光灯が激しい音を立てて割れ、破片が飛び散る。電気が消える。

突然、壁にある店の扉がきしむ。モップの動きが止まる。視線が扉の方に向く。店員の若い女が出てきた。白い袋は持っていない。壁の前で直立する。両足をしゃがむように膝を曲げると同時に、両腕を左右に大きく広げる。と瞬時に身体を元に戻して腕を胸の前で交差させる。

ちらつと亡き母の顔が浮かぶ。母もよく玄関先で同じ動作を……、その顔がすぐに消え、若い女の動きに集中する。彼女の身体は真横に曲がり、それにつれて腕も大きく半回転させる。次に反対側に身体が曲がり、片腕もそれに合わせて曲がる。次はその反対側へ同じ動作をする。若い女が体操を始めたのだ。それも、学校で習ったラジオ体操を。そのリズムに沿って、Kの肩が上下に動く。何度か同じ動作が続く。Kの目から一雫涙が出る。な

ぜだかわからない。

若い女は身体を前かがみにして両手を床につける運動に変える。

またもモップを持った腕が上下する。モップの先端が床につくごとに鈍い音を立てる。

モップの音と若い女の動きとが繋がる。音が先行し、それに引つ張られるように若い女の腕や足が動く。音とモップの動きがズレて一つのリズムを作る。Kの腕もそれに同期する。

コツン…動き…コツン…動き…。

今度は若い女の身体全体が大きく回転し出した。左へ右へ、右から左へ。Kのモップも

左へ右へと動く。……。

女は体操を止め、静かに扉の中へと帰った。

モップは元の場所に返され、Kの足はその場所ですばらく動かなかった。

いつとき治まっていた呼吸の高まりがまた元に返る。このままだとずっとここをねぐら

にしてしまう。固定してしまった光や音やリズムや匂いや湿度と共に、さらには点検員や

老婆や店員と共に。

空気が固まり。ダクトの音が胸を圧迫する。またも息をするのが苦しくなる。心拍が激

しく打つ。頭が熱くなる。

すると遠くから足音が聞こえる。リズムの乱れた足音。しかしそれはKの乱れた心拍と

共鳴する。

いつもの子どもたちの声と足音だ。だが、足音はリズムよくではない。乱雑だ。

ボールが一つ転がってきた。

ボールが壁に当たって斜めに動く。それに向かって子どもたちが動く。突然、バックヤ

ードが子どもたちのサッカー場になる。

子どもたちがKの前を通り過ぎる。前後の空気が風の渦となる。突然、Kの足がねぐらへと戻る。Kの腕がザックをつかんで背中に背負う。理由などない。自然とそうなった。

ボールは箱に当たり、また大きく跳ね返り、元の場所へと戻る。子どもは、逆走してボールのところへと帰る。ボールがまた蹴り直され、すでにひとりの子どもによって開かれていた扉を通っていきよいく外へと飛び出る。「ゴール、ゴール」と子どもたちが歓声をあげて雪崩のように扉から出ていく。ボールや子どもたちの姿がKを外へ出そうとする。空気もKを抱えたまま外へと向かう。

Kの身体は自ずと外へ出てしまった。入ってきた時と同じように。

Kの心拍の音はすぐに低くなり、速さも正常になる。

辺りには大勢の人が歩いていて、ボールも子どもたちもその中へ紛れ込んで、もう見えない。Kは黙って歩き出す。

誰もがKを無視する。だが、今は、Kはそれを気にしない。以前の自分とは少し違う。しかし成長したのではない。ただ、変化しただけだ。

地下街もいつもの「人間タクシー」をやっている場所とはまったく違う。新しい場所になった。バックヤードにはもう帰らない。いやもう帰れない。バックヤードはすでに遠い存在となった。

注 参考文献

『千のプラトール』（ドゥルーズ／ガタリ著・宇野邦一・他訳・河出書房新社刊）

『増補新版ドウルーズ・キーワード』(吉川泰久・堀 千晶著・せりか書房刊)